ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第100号記念号 令和4年（2022年） 3月20日
編集・発行 **神戸市立中央図書館**
〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1
TEL：(078)371-3351 FAX：(078)371-5046

中央図書館２階神戸ふるさと文庫（創刊号の表紙と同じ場所から）

神戸ふるさと文庫の『本棚』

今回で一〇〇号を迎える、本紙『ＫＯＢＥの本棚―神戸ふるさと文庫だより―』は、中央図書館二階に神戸ふるさと文庫ができた翌年の平成三年三月に創刊しました。

館報『書燈』二三五号（平成二年六月）によると、文庫開設にあたり、どのような文庫にするか、各界有識者や市民から意見・アイディアを募ったそうです。それらを元に検討を積み重ね、「神戸の事物、事象、人物等について記述し、或いはそれらを題材・舞台・背景にしたもので、神戸にかかわる資料を網羅的に収集」することとし、文庫開設に向けて一年がかりで資料を集めました。その収集は今も続いています。郷土資料は出版流通に乗らないものが多く、地元書店の店頭、新聞記事、インターネットなどから出版情報を得ています。「神戸の本なのに図書館にない」資料があれば、ご一報いただけると幸いです。

これまでに本紙でご紹介した本は約一九〇〇冊※、神戸ふるさと文庫にも並んでいます。今後も紙面と文庫、二つの「本棚」から神戸の情報と魅力を発信していきます。

※引用掲載を除く

本に描かれた「ふるさと神戸」を巡る

～ランダム・ウォーク・イン・コウベ 100 ～

『ＫＯＢＥの本棚』創刊号から連載を開始した「ランダム・ウォーク・イン・コウベ」では、郷土資料を通じて神戸の様々な名所を訪ね、その来歴を解き明かそうとしてきました。

100回目となる今回は、神戸にゆかりのある小説家や詩人たちが本に描いた「ふるさと神戸」を、著者の生誕順にご紹介します。11人の「神戸」を紙面で巡ってみませんか。

※神戸市立中央図書館で所蔵している本をご紹介しているため、現在は流通していない本もあります。

春の海―宮城道雄随筆集　宮城道雄（講談社　一九九三年）

私は今考えてみると、こうした外国の気分のあった神戸の居留地で（中略）育ったということが、自分の作曲や、芸の上に幸せをしているのではないかと思っている。

（一二九頁「ふるさと」）

箏と尺八の二重奏曲「春の海」の作曲で知られる宮城道雄は、明治二十七年に神戸の居留地五十八番館に生まれた。生後一年経たないうちに目を患い、八歳頃には失明の宣告を受けた。初めは目が見えないことに苦しんだが、箏に親しむようになってからは、音の世界で生きる道を楽しんだという。

その一方で、神戸で過ごした幼少期は、目が見えていた幸せな記憶として残っていたようである。西洋の音楽、茶の匂い、ハイカラな食べ物、旧正月に中国人からもらった赤い包み紙の銀貨など、開かれた街神戸を、五感で楽しんでいる様子が窺える。

宮城道雄（明治27－昭和31）
生田流箏曲演奏家。作曲家。エッセーも多く遺している。

タルホ神戸年代記　稲垣足穂（第三文明社　一九九〇年）

私は「汽車」というロケットに乗って、初めて神戸三ノ宮駅に上陸した。

（一七六頁「神戸三重奏」）

小学生の頃に大阪から祖父母が住んでいた明石へ移り住んだ稲垣足穂は、大正三年に現在の王子公園にあった関西学院中学部へ入学した。

阪神岩屋駅から北に歩いて関西学院に着くまでの道中の雰囲気、三ノ宮駅（現在の元町駅の場所）近辺の店舗の様子などが克明に描写されている。新開地では映画館に足繁く通い、様々な映画を見た。スクリーンの下にオーケストラボックスがあるなど、当時は無声映画を上映していた様子も窺い知ることができる。

神戸で過ごした少年時代、そして大人になって視点が変わってからの回想とが交錯し、エッセーながらも足穂特有の幻想的な表現がちりばめられている。

稲垣足穂（明治33－昭和52）
小説家。天体や機械、少年愛などをモチーフにした作品を多く手掛けた。

横溝正史自伝的随筆集　横溝正史（ＫＡＤＯＫＡＷＡ　二〇〇二年）

神戸の図書館ものちに大倉山へ移転したが、当時は相生橋の近くにあった。私が図書館の味をおぼえたのは小学校の五年のころだったが、わが家からその図書館までは子供の足でも十五分くらいの距離であった。

（二三四頁「続・書かでもの記・11」）

横溝正史は東川崎町で生まれ育った。小さい頃から本好きの正史は、図書館へ頻繁に通い、六年生の時、血眼で探していた『古城の秘密』後編を図書館の目録に見つけ狂喜したが、いつも貸出中でついに読めなかったと回想する。神戸二中では、同じく探偵小説を愛好する親友と外国の探偵雑誌を求めて三宮の古書店を巡った。

二十四歳で江戸川乱歩の招きにより上京するまでの神戸の記憶は、複雑な家族事情など暗い思い出と語るが、自身のルーツを書いておきたかったという。

＊『古城の秘密』前・後編は三津木春影訳　原作はモリス・ルブラン著『８１３』

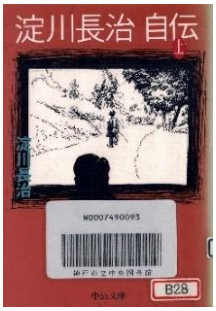
横溝正史（明治35－昭和56）
探偵小説家。『八つ墓村』『悪魔が来りて笛を吹く』『悪魔の手毬唄』など神戸が登場する作品が多数ある。

淀川長治自伝　上・下　淀川長治（中央公論社　一九八八年）

私は東京という田舎へ何ゆえに行かねばならぬのかとムカムカしていたのであった（中略）それほど私は神戸を愛し、神戸が日本最高のほんものの文化都市と信じていたからだった。

（上巻三〇四頁「いよいよ神戸を去る」）

昭和十三年、勤めていた映画社に東京転勤を指示された時の心情である。淀川長治は西柳原の芸者置屋の家に生まれた。花柳街の中心地で町内の頭株だった父に連れられ、幼い頃から毎週奇術や芝居、活動写真を一等席で観た。新開地の入り口にあった大正ポンポンあめの匂いや、活動写真館が競って掲げた絵看板のイルミネーションの光が、活動写真を観る前の高揚感と共に鮮やかに思い出されると綴る。長治が観た夥しい数の映画の記憶は日本における映画の足どりを伝える貴重な記録で、大正・昭和の神戸を自由に闊歩した早熟で利発な少年の姿を浮かび上がらせている。



淀川長治（明治42－平成10）
映画評論家。『映画と共に歩んだわが半生記』『映画が教えてくれた大切なこと』など著書多数。

神戸―我が幼き日の…　田宮虎彦（小松益喜（中外書房　一九五八年）

このあまい、あぶらっこい味は、関西の味である。神戸をなつかしく思い出す時、このきつねうどんの味が神戸にまつわりついている。

（二四一頁　田宮虎彦「きつねとたぬき」）

大正二年、父の転勤で二歳の時に神戸へ来た田宮虎彦は、京都の第三高等学校へ進学するまでを、この地で過ごした。当時の西灘村味泥に住んでいた神戸一中時代は、近所のうどん屋へ行くことが愉しみだったという。校則違反が先生や先輩に見つからないか、おどおどしながら店に入っていた昔の自分を、「小心な私」とふり返る。

「少年の日の記憶というものは、どんなにつまらぬ記憶にも、泉のような、清らかな、ゆたかな生命の喜びがこもっているようである」田宮虎彦にとって少年の日の記憶は、母の懐で聞いた汽笛や、正月に見た南京町の爆竹、そして、きつねうどんの味などであった。

田宮虎彦（明治44－昭和63）
小説家。代表作に『足摺岬』、亡き妻との往復書簡集『愛のかたみ』などがある。

神戸わがふるさと　陳舜臣（講談社　二〇〇三年）

神戸市民の皆様、神戸は亡びない。（中略）自然が溢れ、ゆっくり流れおりる美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる。

（三五四頁「神戸よ」）

阪神・淡路大震災発生の八日後に神戸新聞に掲載された神戸市民に呼び掛ける陳舜臣の言葉である。

大正十三年に神戸で生まれ、戦後すぐの約三年半を除いて神戸を離れたことはない。昭和三十六年、神戸を舞台にした推理小説『枯草の根』で作家デビューし、その後も神戸を舞台にした作品を多く発表した。

生涯にわたり神戸を愛した舜臣は、水害や空襲の壊滅的な被害から立ち直る神戸の人々やまちを見てきた。

阪神・淡路大震災発生時も、灘区の自宅で被災している。そして、神戸の復興を見守り、亡くなるまで人々にエールを送り続けた。

陳舜臣（大正13－平成27）
小説家・エッセイスト。神戸を舞台にした推理小説を多数執筆。中国や西アジア、インドの歴史小説、随筆などの作品多数。

歳月切符　田辺聖子（集英社　一九八六年）

神戸というと港や異人館や元町、ハイカラでモダンなところと想像していたのに、下町にはそんな匂いも気配もなく、（中略）異人館も港のエキゾチシズムも、どこの話かいなと思わせるのであった。

（二一一頁「神戸」）

昭和四十一年、三十代後半の頃に尼崎から神戸へ移り住んだ田辺聖子は約十年間を神戸で過ごした。

「神戸でハイカラに優雅に暮らす」ことはなかったが、たちまち馴染み、聚楽館向いのおでん屋や湊川商店街などで「神戸庶民文化」を満喫した。

連載の仕事と毎日の主婦業をこなす生活に力を与えてくれたのは、下町の猥雑なエネルギーと神戸のロマンチックなムードだった。恋愛小説であれば、神戸を使うだけで、ムードができ上った感じだと語っており、『ダンスと空想』などの作品で神戸が舞台となっている。

田辺聖子（昭和3－令和元）
小説家。昭和39年に『感傷旅行（センチメンタル・ジャーニイ）』で第50回芥川賞を受賞。

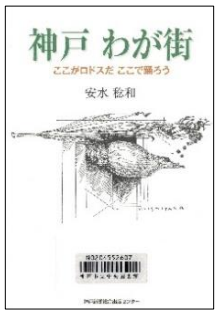
神戸わが街―ここがロドスだここで踊ろう　安水稔和　『神戸わが街』編集委員会編（神戸新聞総合出版センター　二〇一六年）

夕暮時。私は岸壁に腰をおろしていた。渡り板のむこうの小舟のうえに七輪としぶうちわを持った男があらわれて魚を焼きはじめた。

（二十二頁「艀溜り」）

艀溜（はしけだま）りと題した文の一節である。国際貿易港として発展し、震災を乗り越え、人・物・情報が行き交う神戸港。今は多くの人が集う憩いの場メリケンパークもかつては荷役作業に従事した艀の係留地であり、生活の場であった。心に刻まれた波止場の風景の中から、在りし日の姿を描き出す。

安水稔和は兵庫県を代表する詩人である。神戸で生まれ育ち、空襲、震災を経験した詩人は、イソップの寓話『ほらふき』にならい、言葉を探し求めて、神戸、そして今いるところで踊り続けている。



安水稔和（昭和6－）
詩人。詩集では地球賞、晩翠賞、ラジオドラマで芸術祭優秀賞、井植文化賞、神戸市文化賞など受賞多数。

くんぺい少年の四季　東君平（サンリオ　一九九一年）

私は近所にあった湊川神社の林の中へ潜り込んで椎の実を拾ってきては、フライパンでカラカラと音をたてて煎ってたべた。椎の実は栗のような味がして、たいそう美味なものだったので、私の大好物だった。

（六十二頁「椎の実」）

昭和十五年、戦前のあわただしさの中で生まれ、戦後の悲しさの中で物心ついたと語る絵本作家・東君平が、神戸で過ごした自らの少年時代を振り返る。

五歳で体験した大空襲や食糧難、進駐軍のジープなど戦争の影が見え隠れする中、楽しかった思い出のみを書き残したいと、子どもたちの遊びや湊川神社のお祭り、ラムネやミカン水の味、兄妹や両親とのやりとりなどをユーモア漂う文章で綴る。切り絵による挿絵が素朴な懐かしさを醸し出している。

東君平（昭和15－昭和61）
絵本作家・童話作家。代表作に『おはようどうわ』『くんぺい魔法ばなし』などがある。

ノー・シューズ　佐々木マキ（亜紀書房　二〇一四年）

須磨の海は、開かれた窓だった。ゴミゴミした街に住んでいて息が詰まりそうになった時、須磨の海があったのは―そして市街の背後に連なる六甲山地があったのは―どんなに救いだったろう。

（一〇九頁「すま」）

著者は、長田区の海側、商店街や映画館が多くある賑やかな場所で育ち、一九六九年に上京した。

須磨海岸までは歩いて三十分、泳いだり、釣りをしたり、水族館で魚ではなく漫才を見たり。山も身近な遊び場であった。物心ついた頃から、近所の年上の子たちと登った高取山。中学生になると一人で山歩きをするようになり、厄介な時期を山と映画館と貸本屋の本でやり過ごしたという。

多くのマンガと出会い、自分にも何か描けるかなと一九六六年『ガロ』に風刺マンガを投稿する。それが何者でもないものから、何者かへの第一歩であった。

佐々木マキ（昭和21-）
マンガ家・絵本作家・イラストレーター。『やっぱりおおかみ』などの絵本や村上春樹作品の表紙イラストを多く手掛けている。

「好き」の因数分解　最果タヒ（リトルモア　二〇二〇年）

赤紫の電車。海と山のどちらもが見える。震災の記憶。（中略）ジャズ喫茶、チキンジョージ、六甲牧場、六甲山。誰も知らない町のように思う。私しか知らない町のように思う。

（九十八頁「神戸」）

最果タヒは、一九八六年に神戸市に生まれ、七歳のとき阪神・淡路大震災を経験した。

「好き」なものについて綴った本書で、ぬいぐるみや食べ放題に並んで神戸を挙げている。

知らず知らずのうちに著者の中に「神戸」が蓄積されていて、「町」という言葉からイメージする風景は、自然と神戸の姿が基準になる。見慣れたビルや好きだった楽器屋がなくなり、変わり続ける故郷神戸は、「忘れるとか忘れないとか、そういう選択肢を持たない」存在であるという。

最果タヒ（昭和61-）
詩人・小説家。2004年からインターネット上で詩作を始める。現代詩手帖賞、中原中也賞等を受賞。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
神戸市広報印刷物登録　令和3年度第120号-3
（広報印刷物規格　B-1類）